である。善妙の像はこのように象徴的に高い意味をもつものであるが、義湘は僧籍にあるものとして、その愛を拒絶しなくてはならなかった。

物語の展開は、善妙の情念の宗教性への昇華に重点をおいている。しかし、彼女の化した龍が最後に石化したことは何を意味しているだろうか。石化は永続性を示すものである一方、そこに生じた情念の固定化をも意味する。善妙が義湘へと向けた情念は、宗教性へと昇華する一方で、再び活生化されることを待つことになったものと思われる。

これらの考察を踏まえて、明恵の前述の夢をみるとき、彼が内的にこの課題をやり抜いたことを示している。石化されていた善妙に彼は再び生気を与えたのである。外的にはあくまで不犯の禁を守りつつ、内的にこのような仕事を達成し得たことは、彼の宗教性の次元の深さを示しているものと思われる。

明恵のこの夢は親鸞の「六角堂の夢」と、多くの点で対比し得るものであるが、その点については他日を期したい。明恵と親鸞は対立する派に属しつつも、同時代の人間として、同一の課題に取り組んでいたとも考えられる。

過疎考

大谷大学教授　池田義祐

今日の過疎問題を考えるにあたって、私はどうしても昭和初期の我が国の農村問題を思い出さずにはおれない。当時の農村問題は、世界的大不況下で、我が国の農業・農家・農村が決定的な大打撃を受け、殊に東北農村において冷害と相俟って悲惨きわまる社会状況が展開されていた。今日では想像できないような暗憺たるもので、例えば農家の娘の人身売買や小学校児童の大量の欠食問題など、まことに深刻なものであった。然しながら、そこには今日見られるような人口の過疎化現象は全般的に云って生じていない。むしろ人口の過剰現象（過密現象とは異る）が見られる。これは確に人口学的見地からは、ある程度まで説明できる事象である。すなわち、資本主義的自由経済制度の社会では、好況時には農村から都市への人口流入（離村向都現象）が顕著となり、これに反して不況時には都市から農村への人口還流（離都帰村現象）が生ずるのであって、農村の次・三男が都会で失業したり、一旦、都会へ売られて行った農家の娘達がやがて未婚の母となって子供を連れたりして結局は帰村するなど、そうした一面にほかならない。

このように昭和初期の一大社会問題であった農村問題は、農村の人口過剰、人口停溜という性格を有っていたのに対し、今日の社会問題としての農村（特に山村）問題は逆に主として人口の急

激な減少、すなわち過疎という一面を特色としているのである。それはまさに好況時における離村向都という人口移動の極限の状況、否、もはやそれを超えた異常な状況をさえ含んでいると云えよう。

わが国に過疎問題が重大な社会問題として取り上げられたのは、周知の如く、昭和三十年代後半から昭和四十年前後からである。昭和三十五年頃から始まる高度成長時代、すなわち大都市を中心とする好況とまさに並行して、我が国の農村、殊に山間部の村々に急激な人口の減少と、それに伴う社会――経済生活の衰退・崩壊と云う所謂「過疎問題」が発生してきた。このようにして我が国における過疎問題は、昭和四十年代に入ってから、俄かに社会問題としてクローズアップされ、社会学や農業経済学、社会問題論、社会政策、地域社会論、さらには文化人類学などにおいて取り上げられ、又政治的な種々の対応策が実施せられ、そのほか一般のジャーナリズムの世界でも喧伝されるようになった。

さて、私は今ここで右のような各方面からなされた、ここ十余年間に及ぶ過疎についての多くの研究の成果を、それらの一々について詳細に述べる時間の余裕をもたず、又それらのすべてについて綿密に読破し検討したわけでもないので、いささか推論的提言となるかもしれないが、それらの研究を通して共通に認められる点の一つをとりあげて、以下それについて私見の一端を述べることとする。それでは、その共通点は何かと云うと、過疎現象は確かに我が国の全地域（主として山村）に亘って広く現われているところであるが、（〃夜間型過疎現象〃は、今や大都市の中心部に現われているが、ここではとりあげないこととする）それらを更に分析しみると、直ちに明らかなことは、過疎現象における東日本と西日本の相異という点である。すなわち、先ず、東北地方を中心とする東日本（この場合北海道は除く）と、九州・四国・中国地方を中心とする西日本とでは、次のような相異点が指摘できるのである。

一、統計的に見て、昭和三十五年以降の著しい人口減少は西日本の山間地帯に多発しており、東日本の場合は比較的緩漫である。

二、さらに重要なことは、西日本においては人口減少が内実的に、所謂〃挙家離村〃（全家離村）、さらに進んでは全集落離村（廃村）の形態をとりつつあるのに対し、東日本では、かかる形態をとることが比較的少く、出稼ぎ型もしくは家族員による部分的離村の型をとっている場合が少くないという点である。

（註）ここでお断りしておくが、社会現象にかかわる科学的命題は、決して法則的確実性によって支持されているものではなく、傾向性または程度の問題として、常に例外や逸脱を含んでいるものである。従って今の場合でも、東日本に全家離村型・全集落離村型がたまたま見出されたり、西日本に部分的離村型の過疎地域が現存していることは云うまでもないのである。

さて、私は我が国における過疎問題を論ずる場合、全国的レベルで過疎一般を考察するよりも、このようにかなり歴然とした相異を示している東日本と西日本の過疎現象を比較することによって、我が国における過疎の本質により深く接近することができると考え――なお、このような見解に基いてなされた最近の研究に「過疎の実証分析――東日本と西日本の比較研究」（斎藤晴造編

著、一九七六、法政大学出版局）と云うすぐれた業績がある。過疎問題の研究では最新の注目すべき代表的文献であり、私自身も本書に負うところ大である。――斎藤氏の大著が経済学的な観点からなされているのに対し、私は社会学的観点から、ここで若干のことを考えてみよう。以下において私は社会学的観点として、第一に我が国の農村社会学における村落類型論をとりあげ、第二には理論社会学の領域における集団論（集団の構造と結合についての一般理論）をとりあげ、この二つの観点から、過疎の比較研究を試みる場合の社会学的説明原理の有効性を検討してみたいと思う。

第一に我が国の農村社会学は、第二次大戦後、急速に発達し、特にその実証的研究において多くの見るべき成果が積み重ねられている。それらの代表的なものの一つとして村落類型論がある。それは我が国の代表的な農村社会学者である有賀喜左衛門氏や福武直氏などによって提唱された「同族型村落」と「講組型村落」の二類型である。前者は本家を中心または頂点とする本――分家間の、いずれかと云えば上下的な家と家とのタテの結び付きが重要かつ根本的な構造原理をなしている村落であり、これに対して後者は、同族型村落のような家と家との上下的な結合が村落統合の基本的原理とはなっていない。従って家と家とが大体において平等な、ヨコの結合を原則としている村落である。例えば前者においては、祭礼などの神事にしても、毎年常に本家が中心になって行っているのに対し、後者ではそれは順番制の当番によって交替にとり行なわれ、〃頭屋〃は廻り持ちとなっている。村落の政治・行政上の役職についても、本家や本家集団の独占する同族型村落に対し、原則上平等に配分されている講組型村落の相異などを挙げることができる。ところで福武氏によると、同族型村落は東北地方を中心とする東日本に多く、講組型村落は中国地方など西日本に支配的であるという、村落構造の類型論が、ほぼ東日本と西日本という地域の相異とも重なり合っている。このような村落類型論に対しては、その後、かなり多くの批判がなされているが、特に実証的見地から、東日本にも講組型村落が、又西日本にも同族型村落が処々に見出されるとか、同族型村落はむしろ例外ではないかとかの指摘である。しかし、今ここでそうした批判にまで立ち入ることは省略するが、ただ私は現時点（或いは少くとも第二次大戦後）での実証よりも、過去に遡って近世から明治・大正期頃までは、大体この類型論は、東日本と西日本に高度に対応していたのではないかと考えるものであるが、この点についてはまだ確言できる段階ではない。

さて、このような村落類型論と過疎現象に見られる東西の相異とを対照させると、もはや明らかなことであるが、同族型村落と緩漫な部分的過疎現象とが東日本に、これに反して講組型村落と挙家・挙村離村的過疎型とが西日本に、それぞれに高い相関を示しているのである。それでは一応、このような関係を認めたとしても、何故、両者（村落の類型と過疎の類型）が高い相関を示すのか。一方が原因で他方が結果と云う単純な図式化は厳に慎しまねばならないが、時間的に見れば、明らかに村落類型が先行して居り、過疎化は後発しているから、前者が原因で後者が結果という仮設も考えられないことはない。しかし何故、そうなるかは、類型論のなかからも、過疎論のなかからも、今日ほとんど何らの手掛りも得られない。すなわち両者の間には、確かに高い相関関係は見出されるにしても、所謂因果関係（社会科学的意味における）

は析出されえないようである。

そこで私は最後に、第二の社会学の一般理論としての集団の構造と結合の関係から、この問題について、若干の手がかりを探ってみようと思う。

集団（具体的には地域社会としての村落をこの場合想起して欲しい）の構造を考える際に、集団の構成員（この場合は家）間の関係が、少数の成員を中心とし核として構成されている場合と、そうした結合・統合の中心や核にあたる成員が存在しないで相互に比較的独立した形で構成されている場合とがある。両方の場合、集団の結合を考えてみると、集団が対内的にも対外的にも重大な問題に当面しておらず、特に対外的に緊張関係に入っていない秋には、種々の副次的な条件によって影響を受ける以外は、集団の結合に大なる差異は生じない。ところが、集団が対内的か対外的に、特に外部から社会的・経済的・文化的衝撃を受ける、いわば何らかの形での非常事態に直面すると、前述の二種の集団、〃核のある集団〃と〃核のない集団〃とでは、そこに大きな相異を露呈する。すなわち前者においては必ずしも急激な集団の解体を直ちに惹起するに到らないが、後者にあっては、成員が直接個々に衝撃を受けることによって、やがて集団の崩壊を容易にひき起すような事態に立ち到る可能性が大である。つまり前者は、核を中心とする集団構造が外界からの衝撃に対して一種の防禦壁を形成しており、個々の成員が直接に影響を受ける程度がそれだけ弱まるわけであり、その反対が後者について云えるわけである。

通常、過疎化の原因として挙げられているものは、昭和三十年代後半以降の高度成長期における村落外部――大都市を中心とする人口（労働力）の吸引、都市との所得格差、燃料革命、交通の発達、農林業の機械化等であるが、これらの多くは、ここに云う村落外部からの社会的・文化的・経済的衝撃に他ならない。それらに対して集団としての村落の対応の仕方が、集団の構造、もしくは現実の構造ではなくとも、過去の構造による残存意識の相異が、集団の結合、成員の定住性・可動性に影響し、その結果、わが国における過疎化の現象に、既に述べたような大きな相異をひき起していると考えられるのである。

勿論、過疎化についてのかかる理解の仕方は、あくまでも社会学という一つの観点からなされたものであることを、忘れてはならない。